

邦画の視聴覚翻訳における聴覚非言語・パラ言語の脚色

『武士の一分』の場合

安達 励人

1 序論

この研究の目的は、邦画『武士の一分』の英語吹き替え版 *Love and Honor* の制作過程において、音声面（背景音楽や効果音、パラ言語）にどのような脚色が加えられているかを明らかにすることである。視聴覚メディア・テキストには、視覚言語（字幕など）や視覚非言語（映像など）、聴覚言語（音声セリフなど）、聴覚非言語（背景音楽など）の4つのコードがあり（Delabastita, 1989）、このうち本格的な研究の進んでいない音声面に焦点を当てようとする点に、本件の特色がある。音声面の領域の解明を進めることによって、視聴覚翻訳研究に新たな知見を加えることが期待できると考える。

2 『武士の一分』について

『武士の一分』は、藤沢周平の時代小説「盲目剣こだま返し」を原作とする、山田洋次監督の時代劇三部作のひとつである。作品には江戸末期という時代、東北は庄内地方の風土、武士という身分など、日本特有の生活や風物が多く描かれている。

『武士の一分』は、2007年2月16日の第30回日本アカデミー賞で優秀録音賞を受賞しており、音響面の評価は高い。劇中では、多彩な自然音や生活音が丁寧に録音・再現されるだけでなく、地鳴りのような強風や、様々な動物の鳴き声など、小説には描かれていない映画独自の音声面の演出が加えられており、音の織りなす聴覚的環境をとおして、作品世界をより豊かに表現している。

英語吹き替え版の *Love and Honor* は、アメリカのエンターテインメント会社ファンメーション（FUNimation Entertainment）が制作と配給を行った。CEOのゲン・フクナガ（Gen Fukunaga）によると、『武士の一分』を選んだ理由は、(1) 芸術的にとても優れた作品であること、(2) 黒澤明やサムライ映画のファンを取り込むことで観客層の拡大が見込めること、(3) 2002年に封切られた『たそがれ清兵衛』が、第76回米国アカデミー賞において外国映画部門にノミネートされたことの3つである（Fukunaga, 2008）。

3 先行研究

発表者が行ってきたこれまでの研究から、日米映画の翻訳過程で音声面に加えられる脚色に関する以下の知見を得ている（Adachi, 2010, 2013, 2016; 安達 2017, 2018）。

- (1) アメリカ映画と邦画 60 作品の原語版および翻訳版 120 バージョンを対象に行った分析では、邦画の平均沈黙回数はアメリカ映画の 2.5 倍以上に上る。
- (2) 英語から日本語に翻訳される過程では、沈黙数や長さ、位置に大きな変化はない。一方、日本語から英語に向かう場合には沈黙数が激減する。
- (3) 同じ言語内でもジャンル間の不均衡がある。

4 *Love and Honor* の特徴

先行研究では、邦画が英訳される過程で沈黙数が減少するという傾向が示されたが、『武士の一分』の予備研究からは、英語版の方がオリジナルよりも沈黙回数が 4 割近くも増加していることがわかった。この点が、*Love and Honor* の音声面における大きな特徴である。

一方、*Love and Honor* の制作に携わったアメリカ人音響編集担当者からは、次の情報を得た。まず、契約上の制限から、新たな効果音や背景音楽を加えることはできない。また、オリジナルの音源から削除した音もない。ただし、当時の編集環境の影響から、オリジナルに比べて効果音や背景音楽の音圧レベルが低い傾向はある。そして、一般論ではあるが、ダイナミックレンジを広げるなど、アメリカの観客の嗜好に合わせた変更を加えることがディレクターの判断で行われている。

5 分析と結果

分析の結果、*Love and Honor* の音響編集担当者からの情報とは異なり、英語版には削除された音や加えられた音が数多くあることが明らかになった。言語面の忠実な翻訳姿勢に比べて、音声面には自由度の高い脚色が

施されているが、全体的には音声の削除と音圧低減の影響が大きく、予備研究における沈黙数の増加はこれに起因することがわかった。

6 考察

音声面の操作が行われた主な理由としては、以下の4つが考えられる。

第1に、作品全体の雰囲気づくりのためである。特に、クライマックスの果し合いからエンディングの大団円までの約20分間は、背景音や効果音の音圧低下が顕著であるが、これによって作品の静かで質実な側面がより強調された。

第2の理由は、映像との調和を図るためである。音響効果の中には、画面に映ったものと一致しないため、あるいは映像の雰囲気と合わないために削除されたと考えられるものがある。たとえば、作品冒頭のコミカルな場面に予兆として鳴り響く不吉な雷鳴や、深刻な状況で聞こえてくる寺の鐘の音、藩主が登場する緊張した場面に闖入するトビの鳴き声などが、その例である。

第3に、映像と音声を同期させる必要から、口の動きを伴わないうめき声や笑い声などのパラ言語はアフレコしないという方針がうかがえる。同じ理由で、画面外から聞こえてくるセリフがカットされたケースもあった。逆に、口の動きが見えていれば、遠方の人物同士の会話であっても通常の音量で吹きかえるなど、観客に聞かせたいセリフとそうでないものとを明確に区別したアフレコが行われている。

第4に、背景音楽の音圧に操作を加えることで、抒情性やドラマ性を高めるための脚色が施される事例があることもわかった。

7 結論

映像やセリフに比べて、音声面の脚色は観客が気づきにくい要素であるため、背景音楽や効果音の操作によって知らず知らずのうちに作品の雰囲気が変えられることがあり得る。『武士の一分』の場合も、オリジナルは雄弁で豊かな音響効果が高く評価されたが、英語版は音声の脚色によって静寂な印象をより強く残す作品となった。その背景には、映像と音響を一致させようという配慮や、アメリカの観客にとってわかりやすく、情感に訴える音声メッセージを伝達しようとするねらいがうかがえた。また、英語版の制作者が意図したかどうかは別にして、『Love and Honor』の音声処理は、物静かな日本人というステレオタイプ (Cargile & Giles, 1998) を強化する結果を招いたと言えるかもしれない。本研究によって、言語面の忠実な翻訳姿勢に比べて、音声面には様々な脚色が加えられていることが実証されたことから、今後も、視聴覚翻訳における言語面と非言語面の翻訳方略のねじれを解明する研究を進めていきたい。

謝辞

本研究は JSPS 科研費 15K02374 の助成を受けたものである。

参考文献

- ADACHI, R. (2010). Basic analysis of dialogue data on pauses and silences in Japanimation movies: Comparison of original Japanese and American animations with their translated versions. *Eibeibunka*, 40, 243-259.
- ADACHI, R. (2013). Fundamental research on the translational attitude toward Japanese-dubbed American animated films: *Toy Story* and *Shrek*. *Bulletin of Kurashiki City College*, 56, 1-6.
- ADACHI, R. (2016). Dubbing of silences in Hayao Miyazaki's *Spirited Away*: A comparison of Japanese and English language versions. *Perspectives: Studies in Translation Theory and Practice*, 24 (1), 142-156.
- Cargile A. C. & Giles, H. (1998). Language attitudes toward varieties of English: An American - Japanese context. *Journal of Applied Communication Research*, 26 (3), 338-356.
- Delabastita, D. (1989). Translation and mass-communication: Film and T.V. translation as evidence of cultural dynamics. *Babel*, 35 (4), 193 - 218.
- Interview with Gen Fukunaga, part 2: Demographics and 2008 plans. (2008, January 21). Retrieved from <https://icv2.com/articles/comics/view/11936/interview-gen-fukunaga-part-2>
- 安達励人 (2017). 「The Lego Movie の翻訳過程における音声変化に関する一考察」『倉敷市立短期大学研究紀要』60, 13-20.
- 安達励人 (2018). 「日米映画吹き替え版における沈黙数のジャンル間比較」『倉敷市立短期大学研究紀要』61, 1-9.